

SHOW-HHEYシネマールム

★★★★★

Data

監督・脚本：莊文強（フェリックス・チョン）

出演：周潤發（チョウ・ユンファ）
／郭富城（アーロン・クオック）
／張靜初（チャン・ジンチュウ）
／馮文娟（ジョイス・フォン）
廖啟智（リウ・カイチー）
／周家怡（キャサリン・チャウ）
／方中信（アレックス・フォン）
／高捷（ジャック・カオ）

プロジェクト グーテンベルク 贗札王
（無雙 Project Gutenberg / PROJECT GUTENBERG）

2018年／香港・中国映画
配給：東映ビデオ / 130分

2020（令和）年2月11日鑑賞

シネ・リープル梅田

👁️👁️ みどころ

時代の流れはキャッシュレスだが、高齢者を中心に現金志向が残っているうちは通貨偽造も！米国で新たな100ドル紙幣が発行される今、三代も続く“画家”をリーダーとする贗札製造集団の暗躍は？

「何事も極めれば芸術。心をこめれば、偽物は本物に勝る。」若き画家レイは“画家”のそんな殺し文句にイチコロ！ホンモノの画家を目指す恋人ユンと別れて、贗札作りに邁進することに・・・。

贗札は作るのも難しいが、さばくのがより大変。それを仕切る強いカリスマ性を持った“画家”だが、その舞台が世界に広がると同時に捜査も国際的に！

スタイリッシュでスピーディな展開に徹する脚本はお見事。よくぞ130分でこれだけの内容を入れ込んだものだ。“甦るチョウ・ユンファ伝説”を感じ取りながら、ホテルの一室での結末シーンの目撃者となり、その余韻も含めて香港映画のエッセンスをしっかりと楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■タイトルの意味は？グーテンベルクは活版印刷の父！■□■

本作は、原題も英題も『Project Gutenberg』で、邦題も同じだが、グーテンベルクって一体ナニ？あなたは「活版印刷の父」と呼ばれるヨハネス・グーテンベルクを知ってる？ルネッサンスの三大発明は、羅針盤、火薬、印刷技術の3つ。1398年ごろに生まれ、1445年までに活版印刷技術を考案し、その機器の実用化に成功して、自ら印刷業・印刷物出版業を創設したのが、ドイツ生まれのヨハネス・グーテンベルクだ。なるほど、なるほど。しかし、本作はなぜそんなタイトルに？

今の時代、中国を中心にキャッシュレス化が進んでいるが、日本ではまだまだ高齢者を中心に現金崇拝志向が強い。日本では、2024年から一万円札が渋沢栄一に、五千円札が津田梅子に、千円札が北里柴三郎に改められたうえ、新紙幣への切り替えが決まっているが、アメリカでは今、新たに100ドル紙幣を発行するらしい。そうなると、“画家”を中心とした贗札製造集団の出番に・・・？

■主役は“画家”役の周潤發（チョウ・ユンファ）！■

本作は、“画家”役を演じる今年御年65歳になる周潤發（チョウ・ユンファ）を主役に起用した異色作。香港電影金像獎（香港アカデミー賞）において最優秀作品賞をはじめとする多くの賞を受賞した本作は、『インファナル・アフェア』3部作（02年、03年）と同じようなスタイリッシュな展開が際立っている。贗札製造集団にとっては、贗札作りの大変さはもちろんだが、それ以上に製造した贗札のさばき方や長年に渡る秘密保持が難しいはず。ところが、本作の贗作製造集団は、その稼業が三代も続いているというからすごい。

“画家”をリーダーとする贗札製造集団のスタッフは、①“画家”の父と仕事をしてきた原版技師のヤム（リウ・カイチー）、②管理担当の女性ラム・ライワー（ポーリン・シュン）、③警部担当のボビー（デオン・チャン）、④輸送担当のセイ・ホイ（ジャスティン・チャン）たちだ。もっとも、本作の主人公になるのは、画家志望の男レイ・マン（アーロン・クオック）だから、それに注目！

映画で贗作作りのノウハウを懇切丁寧に教えるのは教育上よろしくないが、本作では冒頭から贗作作りの基本中の基本である原画作りの風景をスクリーン上に描き出すので、それに注目！若き日のアラン・ドロンが主演した『太陽がいっぱい』（60年）では、主人公が親友のサインを真似る（偽造する）べく懸命に努力する姿が印象的だったが、本作では、まざタイの刑務所の中で、レイが偽郵券作りに励む姿に注目！もっとも、これを見れば、グーテンベルクは大いに嘆くはずだが・・・。

■画家を目指す若い男女の方向性は？決定的違いは？■

芸術の都パリに若い画家の卵が集まってくるのは当然。日本で有名な藤田嗣治画伯もそんな若者の1人だったことは、『FOUJITA』（15年）を観ればよくわかる（『シネマ37』未掲載）。他方、日本では加藤登紀子が歌って大ヒットした『100万本のバラ』は、女優に恋をした貧しい画家が家財を売り払ってバラを捧げるというロマンチックな歌詞が涙を誘ったが、原曲は大国ロシアに翻弄されたラトビアの苦難を暗示するものらしい。またこの歌の主人公の画家はグルジアの画家で、パリに集まった若い画家ではないらしい。しかして、画家を目指して今、カナダのバンクーバーで貧乏生活にもめげず、励まし合いながら画家としての名声を得ようと頑張っている恋人同士のレイとユン・マン（チャン・ジンチュウ）を見ていると、努力の面でこの2人は、決してグルジアの画家、ニコ・ピロスマ

二に負けていないことがよくわかる。その結果、ユンはロク（カール・ン）に才能を認められて個展を開くまでになったが、レイの方は生計のため有名画家の贋作を手掛けるまでに堕ちていたからアレレ……。この2人の方向性の違いは決定的に！ある日、そんなレイの前に“画家”が登場したところから、レイの人生は大きく転換していくことに……。

香港映画には、香港警察がよく似合う(?)。しかし、本作冒頭でタイの刑務所に収容されていたレイは今、香港警察のホー副署長（アレックス・フォン）とその娘であるホー警部補（キャサリン・チャウ）の取調べを受けていた。その容疑は、仲間の殺人容疑などさまざまなもの。ところが、そこに今は国宝級の女性画家に成長したユン・マンがレイの友人と名乗りマネージャーであるロクと共にレイの保釈を要求してきたから、ややこしい。そこで、ホー副署長は、保釈を認めるかわりにレイが今も行方不明になっている“画家”について話すことを要求したが、さあレイは？レイが画家について語ることを一切拒否してきたのは、一体なぜ？それは、冷酷無比な画家の報復に脅えていたからだ。そんな中、レイの口からは“画家”についてどんな告白が……？

そう思い、かつその内容に大きな期待をしたのは、ホー警部補も私も同じ。しかし、その後レイの口から語られるのは、カナダのバンクーバーでユンと2人で暮っていた時の苦労話ばかり。イライラしたホー警部補は、2人の恋物語の展開はもうやめて、早く“画家”の話に入るよう促したが……。

■□■一種の「師弟モノ」だが、2人の絆は？■□■

「師弟モノ」の名作は多いが、その代表は『スパイ・ゲーム』(01年) (『シネマ 1』23頁)。同作では、ロバート・レッドフォード扮する師匠ネイサンと、ブラッド・ピット扮する弟子のビショップが一贯して「固い絆」で結ばれていた。しかし、本作でも「何事も極めれば芸術。心をこめれば、偽物は本物に勝る。」と語る“画家”のカリスマ性に惹かれたレイが、“画家”をリーダーとする贋札製造集団に参加するシークエンスが描かれる。しかし本作では、他方でいくつかの場面で、レイが“画家”と衝突し、“画家”に反抗する場面も登場するので、それに注目！

親子三代にわたって贋札製造を稼業にしながら、逮捕歴なしを誇る“画家”の“人生訓”や、「贋札を私的に使用した者は家族共ども処刑」等の組織の掟は徹底していた。それを徹底させていたからこそ、贋札製造集団の世界に広がる大口の取引先は安定していたうえ、秘密保持が守られ、親子三代も続いてきたわけだ。しかし、どんな場面でも非情にコトをやっつけてのける画家に対し、まだ若く、時として感情に走ってしまうレイは違和感を持ったり反発することも……。

本作では、『スパイ・ゲーム』とはかなり違う、そんな2人の師弟ぶりをしっかり観察したい。

■□■レイの恋模様は？ユンのライバルは？■□■

本作には香港、台湾、中国出身の美人女優が大勢登場するが、そのメインは若き日にレイと共にカナダのバンクーバーで暮らしたユン。ところが、導入部でレイの保釈を求めて登場してくるユンの魅力は？ユンを演じたチャン・ジンチュウは、『孔雀 我が家の風景』（05年）（『シネマ17』176頁）や『ビースト・ストーカー／証人』（08年）（『シネマ34』453頁）での演技は絶品だったが、役所広司と共演した『オーバー・エベレスト 陰謀の氷壁』（19年）はイマイチだった（『シネマ46』未掲載）。それと同じように、本作では若き日のユンはそれなりに魅力的だが、黒い服で大きなサングラスをかけ、無表情を貫く世界的女流画家に成長したユンの魅力はイマイチ……。

レイの周りに登場する女たちのうち、レイの取調べにあたるホー警部補がキツイのは当然だが、彼女もなかなかの美女。また、贋札製造集団の管理部門を担当するラムもなかなかの美女だ。さらに、後述のゴールデン・トライアングルの銃撃戦で、レイが助けた女性が将軍（ジャック・カオ）に囚われていた偽札製造の専門家シウチン（ジョイス・フォン）だが、これもなかなかの美人。

あの激しい銃撃戦の後、シウチンは命の恩人であるレイに対して淡い恋心を抱くことになったから、さあレイの恋模様は？ロクとの婚約を発表したユンに今なお未練を持つレイは、仕事の上では画家との師弟関係に悩んでいたうえ、恋の面でもユンとシウチンとの関係で悩むことになるの……？

■□■貫禄と存在感に注目！さすが香港の小林旭！銃撃戦は？■□■

去る2020年2月11日にはプロ野球の野村克也が84歳で亡くなったが、その前の1月18日には日活の映画スター・宍戸錠が86歳で亡くなった。その宍戸錠と共に、『渡り鳥』シリーズをはじめとして1960年代の日活のガンアクションを牽引したのが小林旭。そして、『男たちの挽歌』（86年）が日本で公開された1986年当時、“香港の小林旭”として紹介されたのがチョウ・ユンファだ。石原裕次郎、二谷英明、そして宍戸錠亡き今も、80歳を超えた小林旭は歌をメインに大活躍を続けているが、それに比べればチョウ・ユンファは御年65歳だからまだまだ若い。香港を代表する映画スターとしての彼の活躍ぶりはパンフレットにある、くれない響氏（映画評論家）の「甦るチョウ・ユンファ伝説」や、デューク廣井氏の「チョウ・ユンファ久々のクライム・アクション、激動の1990年代に咆哮するダークサイドのユンファ撃ち！」で紹介されているが、本作後半では、まさに「チョウ・ユンファ久々のクライム・アクション」を見せる（魅せる）ためのストーリー（脚本）として、ド派手な黄金の三角地帯（ゴールデン・トライアングル）での銃撃戦が登場する。

本作は、“画家”という肩書きで登場する贋札製造集団のボスの貫禄と存在感が圧倒的だ

が、ストーリーの主演は若いレイに譲っている。したがって、本作の脚本では、それを補い、チョウ・ユンファの銃撃戦の魅力を見せる（魅せる）ために、わざわざゴールデン・トライアングルの闇組織を牛耳る將軍との取引というストーリーを挿入させている。“画家”をリーダーとする贗作製造集団の取引先が世界各国に広がっていること、また、そこでは厳格な秘密保持がキープされていることは前述したが、ゴールデン・トライアングルでもそれは同じ。したがって、久しぶりに再会した画家と將軍は抱擁を交わしたうえで、新たな商談に入ったが・・・。

後述のように、本作の脚本は後半からクライマックスにかけて複雑になってくるが、ここは意外に単純。なぜなら、ここではチョウ・ユンファの銃撃アクションを見せるのが目的だから、商談をぶっ壊せばたちまち將軍と画家との戦い（銃撃戦）の展開に入ることができるからだ。1960年代の日活のガンアクションがド派手な見せ場の演出に徹していたのは明らかだが、それは1980年代の香港のガンアクションも同じ。そんな展開の中で、小林旭や宍戸錠、そしてチョウ・ユンファのガンアクションがもてはやされてきたわけだ。しかして、2020年の今、スクリーン上で炸裂するダークサイドのユンファ撃ちは如何に？日本では銃砲刀剣類所持等取締法があるため銃器ファンが少ないから、本作で画家が使用する銃器の数々を理解しようとするれば、前述したデューク廣井氏のコラムを読む必要がある。まあ、私の見解ではそこまでの勉強は不要で、本作ではチョウ・ユンファ久々のクライム・アクションを心ゆくまで楽しめばいい。もっとも、そこでは贗作製造集団の面々が、贗作作りの技術の他、ガン捌きでも一流ぶりを見せるので、それにも注目したい。

■□■カナダ警察も登場！脚本は更に複雑に！結末は如何に？■□■

去る2月10日に発表された第92回アカデミー賞で、『パラサイト 半地下の家族』（19年）が韓国映画初の作品賞、監督賞等4部門を受賞したのは、あっと驚く結末のおかげ！？そう断言はできないが、その要素が大きいことは間違いない。それとは少し違うが、登場人物が多く、ストーリーが多岐にわたる本作では、それらをいかに要領よく結びつけて観客に理解させたい、あっと驚く結末に向けてストーリーをどう収束させていくかが難しい。チョウ・ユンファのファンサービスのため（？）、ゴールデン・トライアングルでのド派手な銃撃戦を入れたのはご愛敬だが、そこでは前述のように、レイが將軍に囚われていた偽作製造の専門家シウチンを助け出すという新たなストーリーまで挿入させたから、結末に向けてはその新たな恋模様の展開も必要になってくる。そのうえ本作ラストに向けては、カナダでの特殊インク強奪事件を機に、マー主教として極秘で潜入捜査を行っていたリー捜査官（デヴィッド・ワン）まで登場してくるので、それにも注目！彼は、ともに“画家”を追っていたホー警部補との間に愛を育んでいたから、恋模様の展開も更に複雑になっていく。そして、ついに香港のホテルの一室で“画家”とマー主教との取引が行われることに

なったが、そこには、“画家”によって誘拐されたユンとロクの姿もあった。しかし、その取引の行方は？

ホー警部補の取調べに対するレイの告白（自白）というスタイルで始まった、レイとユンの若き日の恋模様や、レイが“画家”の贗札製造集団に加入し、そこで活躍を続ける姿は、なるほどと思わせる脚本の妙がある。また、複雑なストーリーをスピーディかつ要領よい展開で理解させる脚本は、近時の何でも説明調の邦画とは大違いの出来だ。さらに、さまざまなストーリー展開を見せる中での各人各様のキャラも明確にさせているうえ、主要人物それぞれの恋模様まで描いてみせる脚本の技量は大したものだ。しかし、本作ラストに向けて物語はいかに収束していくの？本作ラストのストーリーの舞台になった香港のホテルの一室では、たしかに“画家”は銃弾に撃ち抜かれて死亡！私にはそう思えたが、さて・・・？

そんな疑問（興味）を含めて、本作の結末の行方は脚本の最大の見せどころだから、それはあなた自身の目でしっかりと。

2020（令和2）年2月14日記